

総合型地域スポーツクラブの根幹を振り返ろう

Part. 1

クラブによる自主・自立(律)に向けた取り組み 「クラブ理念の策定・検証」を振り返る

今回より新たにスタートした本連載では、総合型クラブを創設・運営していく上で重要となる根幹の“再確認”がテーマです。連載企画第1弾として、日本体育協会地域スポーツクラブ育成専門委員会中央企画班長の松田雅彦氏による総合型クラブの創設・自立(律)に向けた「クラブ理念」に係る解説を中心に、クラブの創設や運営に携る方々の具体的な「現場の声」をご紹介します。その重要性を再確認します。

大阪教育大学附属高等学校平野校舎 教諭 松田雅彦

北海道体育協会 クラブアドバイザー 久保田 智

青森県体育協会 クラブアドバイザー 佐藤龍哉

1 クラブ運営の根幹 ～理念の共有化～

総合型クラブの経営・運営において「どうして私たちの町に総合型クラブが必要なのか」という理念の共有は欠かせません。総合型クラブは、スポーツを楽しむための新しいシステム(しくみ)ですから、なぜ新しいシステムを導入するのかという合意形成(利害関係の一致)がなければ、組織の経営や運営は難しくなります。

平成24年度の日本における週1回のスポーツ実施率は47.5%でした。諸外国では、この実施率が約90%にも達する国があります。誤解を恐れずに言うと、これは今までの日本のスポーツシステムが、すべての国民が楽しめるシステムとして十分に機能してこなかったことを示しています。それはスポーツ種目・年代・性別・障がいの有無による隔たり、楽しみ方の違いによる隔たり、小学校、中学校、高等学校など学校期で途切れているシステムなどが原因と考えられます。総合型クラブは、そのような壁を取り払い、学校や地域をつなげるシステムですから、その理念や目的はおのずと高くなります。

現場の声

クラブ理念を考える上で大切なこと

「クラブ理念を策定・検証」する際に留意すべき「考え方」

クラブの理念の中には、とりあえず、広報宣伝用のチラシやパンフレットに掲載するために複数のクラブ理念をかき集めてまとめたようなものを見かけることがあります。何でもあればいいよ、という意識で理念を捉えているクラブは、スタッフや会員に対し理念のもたらす大きな力、クラブの原動力を失っています。

確かに大都市に比べると、全国の地方都市の課題は多かれ少なかれ、似たような状況にあることもまた事実でしょう。しかしながら、自らが地域の課題を語りあい、課題解決のためにはこの言葉がキーワードになるのだと、魂の込められた言葉が入った理念では、そのパワーに大きな違いがあることでしょう。(佐藤さん)

創設準備中のクラブへ

なぜクラブを作ろうとしたのか？ そのきっかけが理念作成の第一歩になります。衰退するスポーツ種目、あるいは、子どもの体力低下や少子高齢化など、地域社会はさまざまな問題を抱えています。そこへスポーツを介したアプローチをするのが総合型クラブです。すべての世代が自分の住む地域を見つめ直し、スポーツを文化として根付かせるためにはどうしたらいいのか、そういった地域の情報を把握することが理念の糸口になるかもしれません。難しい言葉ではなくキャッチフレーズのような言葉でいいのだと思います。(久保田さん)

2 スポーツを文化にすること ~スポーツが持つ二つの機能~

みなさん、スポーツが持つ魅力ってなんですか？

私は、大きく二つのことがあると考えています。まず一つ目は、サッカーや野球などスポーツ種目を楽しむという「個人の楽しみ欲求充足の機能」です。そしてもう一つは、人と人・人と地域社会をつなぐことで地域コミュニティを豊かにするという「地域社会醸成の機能」です。この二つがバランスよく備わってこそ本来のスポーツを楽しむシステムであると考えます。しかしながら、これまで二つ目の機能である「地域社会醸成」については、あまり意識されていませんでした。総合型クラブは、この二つのバランスを本来のカタチに整えようというシステムです。日本のスポーツ団体の平均人数は約28人ですが、その人たちが他の組織の人や新しくスポーツを始めた人とつながり、人と人がスポーツという文化で出会い互いに交流を深めることが、やがて地域の絆を深めることにもつながります。総合型クラブは、このスポーツ的関係を地域全体に広げようという試みです。だからこそ総合型クラブの事業は、種目を越えたスポーツ文化という視座からの公益的な活動となるのです。これは、自分のこと（個人の楽しみ）、自分たちのこと（チームとしての楽しみ）、みんなのこと（スポーツ文化としての楽しみ）を考えることなのです。

しかし、この活動が成功していくためには、「プレイヤーズ・ファースト」の視点が必要になります。スポーツ種目が決まっております、その種目を楽しみたい人が集まるというスポーツ種目中心のシステムではなく、地域住民のニーズをしっかりととらえて、スポーツを楽しむ人の視線から事業を導き出すこと、地域のみんなが種目という壁を越え文化としてのスポーツを楽しむことができるシステムが総合型クラブには求められます。このスポーツをプレイしたい人の視点から考えることを「プレイヤーズ・ファースト」といいます。この視点をなくしては、総合型クラブの発展は難しいと考えます。

現場の声

「地域住民のクラブ」であるために

展開する事業が理念に則しているのか、地域住民が望むものなのかは、クラブにとって常にチェックしなければならない重要な項目の一つです。運営や事業に追われ、目先のことだけにとらわれないようにするためにも、理念への立ち返りが地域住民のクラブであり続けるための基本となります。誰かがやるだろうという意識ではなく、常にクラブの事業が理念に則しているかどうかの検証ができる環境整備も重要です。

また、運営や事業について検証するのはクラブ側の仕事ですが、クラブを評価するのは地域住民の方々です。そのためには、地域に密着し、常に地域のニーズに応えられるクラブであることが求められるのです。クラブが地域に貢献できる存在であり続け、地域と共に歩んでいく、そのための礎となる理念がクラブには必要なのです。（久保田さん）

3 策定した理念を検証する

クラブマネージャーやスタッフのみなさんは、昨年と同じ活動ができるように日々奮闘されていることでしょう。しかし、日常の活動だけに目を奪われると、目指すべき方向性や活動の改善点などがわからなくなるときがあります。そんなときの自己評価の指針として総合型地域スポーツクラブ育成プラン2013が掲げる「自己評価ツール」としての「チェックリスト」を使っただけだと思います。すべての項目をチェックするのは大変だという方は、気になるポイントだけでもいいかと思います。特に、設立から5年～7年を迎える総合型クラブでは、活動のマンネリ化やスタッフの疲弊が目立ってくるころではないでしょうか？そんなときには、「どうして総合型クラブを創ったのか？」という原点の確認やクラブの事業評価を行うことが大切です。どうぞみなさま、クラブをよりよいものにするために「総合型クラブ育成プラン2013」をご活用ください。

現場の声

理念検証のためのクラブでの取り組み

スポネット弘前では、下記の通り、日頃の活動の中に理念の共有化や事業を見つめ直す検証の場を設けています。そのため、スタッフの理念に対する理解度や意識も高く、利用会員の満足度の高さにもつながっています。研修会やマニュアルなど、目や耳にする機会を設けることで理念が浸透し、初心を忘れないクラブとして、息の長いクラブ運営につながっているのだと考えています。(佐藤さん)

理念の共有化及び検証のための実践項目

- ▼クラブ設立当初は、毎月、理念に沿った活動ができているかどうかの話し合いを行った。
- ▼新事業の提案を行う際には、企画書の最上段にミッションが記入されているフォーマットを使用。
- ▼スタッフ用・会員用マニュアルをそれぞれ作成・配布し、共通認識を図っている。
- ▼年に一度、1泊2日のスタッフ研修会で理念に基づいた活動ができているか、事業評価を行う。
- ▼事業評価を検証し、その結果にもとづいて、次年度の計画を立てている。

総合型地域スポーツクラブ育成プラン2013 該当ページ P17、18

http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/kurabuikusei/doc/club_ikusei_plan2013.pdf